

夫の家事育児遂行パターンと妻の追加出生意欲

Patterns of Husbands' Participation in Housework and Childcare and Wives' Additional Childbearing Desires

齊藤知洋 (国立社会保障・人口問題研究所)

SAITO Tomohiro (National Institute of Population and Social Security Research)

saitou-tomohiro@ipss.go.jp

1. 目的

人口減少が進行する日本社会において、仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）の実現が少子化対策の一環として注目されている。近年では、就労女性の出産・育児に伴う機会費用を軽減させる可能性として夫の家事育児参加が取り上げられ、家庭内役割のジェンダー平等化が夫婦出生力の向上に寄与するか否かに大きな関心が払われている（McDonald 2000; Esping-Andersen 2009 など）。夫の家事育児の遂行頻度の時系列変化や規定要因、さらには追加出生行動・意欲との関連については人口研究や家族研究を中心に研究蓄積が見られるが、そのトレンドや変数間の関連について必ずしも一貫した知見が得られていない（山口 2009; 藤野 2006; 西岡・星 2009; 水落 2010; 西岡・山内 2016; 松田 2021 など）。さらに先行研究の多くは家事育児の遂行頻度を一次元の尺度に集約しており（筒井 2011）、各活動の遂行に求められる時間資源やスキルの差異を考慮しきれていない。

本報告では、夫の家事育児の遂行パターンを潜在クラス分析（latent class analysis）によって類型化し、それらの時系列変化および妻の追加出生意欲との関連を再検討する。

2. データと分析対象

使用データは、国立社会保障・人口問題研究所が実施した「全国家庭動向調査」の第4～6回調査である。本調査は5年に1度実施される反復横断的調査であり（第6回調査は2018年）、国民生活基礎調査（世帯票）の調査地区から300地区をさらに無作為抽出し、結婚経験のある（もっとも若い）女性を調査対象としている（詳細は齊藤・菊池（2022）を参照）。分析では、調査時点で6歳未満の子どもがいる有配偶女性に限定する。

3. 分析結果

潜在クラス分析の結果、夫の家事・育児の遂行パターンはいずれも①「非遂行型」（全7項目で遂行頻度が低い）、②「部分的遂行型」（ゴミ出し・風呂洗い・食後の片づけ／遊び相手をする・風呂に入れる・泣いた子をあやす・おむつを替えるのみ遂行）、③「全面的遂行型」（全7項目で遂行頻度が高い）の3つのクラスに集約できた。その基本構造（クラス数）は全ての時点間（1998～2018年）で変化はないが、家事遂行については近年ほど「不遂行型」が減少（2018年時点：55.9%）、「部分的遂行型」のクラス割合が上昇している（同：37.1%）。育児遂行パターンは、2018年時点で「非遂行型」（39.0%）、「部分的遂行型」（39.2%）、「全面的遂行型」（21.8%）であった。多変量解析の結果からは、夫の帰宅時間が家事育児の「部分／全面的遂行型」クラスへの所属確率を強く規定しており、夫の育児遂行のみが妻の追加出生意欲に対して正の効果を示した。